

# 奥三河の民俗芸能考

奥三河地方は民俗学の宝庫と言われるほど多くの民俗芸能をはじめ、民俗風習が伝承されている。その中で「国指定重要無形民俗文化財」として知られている三河の田楽と、設楽町・東栄町・豊根村に伝承される花祭りがある。この中で三町村に伝承される花祭りについて考察することにする。

花祭りが世間に周知されるきっかけは、現在の新城市横山出身の早川幸太郎が日本民俗学形成期に、画家出身の眼をもつてきめ細かな観察を行った。山村の民俗調査の第一人者として、著書「花祭」を発刊したことがきっかけで、国内外の民俗学者が調査に入るようになり、現在花祭りの考えが固定化されているものと考えられる。しかし、いづれも考え方に確証はないと思われる。それぞれの学者たちが考察をまとめて述べたものである。

- 「広辞苑」では鬼について次のように記されている。  
鬼とは「隠」で姿が見えない意（おぼ）という）とある。
- ① 天つ神に対して地上などの悪神。邪神。
  - ② 伝説上の山男、巨人や異種族の者。
  - ③ 死者の靈魂。亡霊。
  - ④ 恐ろしい形をして人にたたりをする怪物。もののけ。
  - ⑤ 想像上の怪物。仏教の影響で餓鬼、地獄の青鬼・赤鬼があり、美男・美女に化け音楽・双六・詩歌などにすぐれたものとして人間世界に現れる。後に陰陽道の影響で、人身に牛の角や虎の牙を持ち、裸で虎の皮のふんどしをしめた形をとる。怪力で性質は荒い。
  - ⑥ 鬼のような人。
  - ⑦ 非常に勇猛な人。
  - ⑧ 無慈悲な人。借金取り。債鬼。
  - ⑨ あることに精魂を傾ける人。
  - ⑩ 鬼ごっこで人をつかまえる役。
  - ⑪ 貴人の飲食物の毒見役。お

山修験本宗の本山で、もと天台



津具の柵鬼面

に役。  
⑧ 紋所の名。鬼の形をかたどる。めんおに。かたおに。  
⑨ 名詞に冠して、勇猛・無慈悲・異形・巨大の意を表す語。  
これらから採用するとすれば、②、⑤、⑨などが当てはまるのではと考えられる。  
いづれにしても花祭りは修験者が鬼に相当し、⑤にあるように想像上の怪物であり、地獄の青鬼・赤鬼の姿を想像させ、陰陽道の影響で呪術を用い、医療にも力を及ぼすほど。また⑨にある通り勇猛で巨大な姿は鬼の姿を想像させたものと考えられ、まさに修験者の持つ庶民を超越した力が、いつそう偉大なものとして考えられたことであろう。偉大な力で勇気を与えるのが花祭りの鬼たちであろう。

宗。役小角（飛鳥時代の呪術者）が創建した修験道の中心道場で行われる花供会式が、花祭りに影響しているのではないかと考えられる。また舞の姿形を見ると修験者が岩山の崖をよじ登り、谷を飛び越え、棘の下を姿勢を低くして潜り抜ける姿を想像させる。それを何度も繰り返す様子は、自然との一体化による即身成仏を重視する修験の教義に相当するものである。花祭りは多くの謎を秘めた芸能に相違ない。



東栄町月の花宿

※写真は、名古屋博物館発行「奥三河のくらしと花祭・田楽」より掲載。

（設楽町文化財保護審議会委員

今泉 宗男）

花祭りの起源は吉野山の金峯